

# 若年者の職業イメージ（1）

## —JELS 報告—

中島ゆり（お茶の水女子大学大学院）

### 1. はじめに

本報告では、職業選択を念頭に置き、若年者がいかなる職業イメージを持っているのかを、性別といった要因に着目して分析する。

近年、若者の無業の増加が問題とされ、小学生のころから就業に向けての取り組みがなされることが期待されている。文部科学省は、キャリア教育を検討する審議会を設け、従来の職業教育においては専門的な知識・技能を習得させることのみを重きが置かれ、生徒のキャリア発達をいかに支援するかという視点が欠けていたと反省し、今後は、子どもの精神的・社会的自立を促し、一人一人の発達段階に応じてそれぞれの勤労観、職業観を発達させることを目標としたキャリア教育を推進している（文部科学省 2004）。学校はもはや職業斡旋機能を超え、職業世界とのより密接な結びつきを期待されているのである。

しかし、学校が職業世界をすでに反映したものであることは、ボールド&ギンタスなどのネオ・マルキストがこれまで指摘してきたことである。彼らは、学校が職業世界の要請にもどづいて形づくられており、職業世界の歪みを反映して子どもを教育していると批判した。この批判をふまえるならば、学校と職業世界との関連がフォーマル・カリキュラム化されることで、学校は、職業世界の歪みをより明確に子どもに伝達する恐れがあるとも言える。

そこで、本研究では、子どもの職業イメージを分析し、子どもと職業世界との現在のつながりを明らかにすることで、既存の職業世界のあり様を単に反映させてしまうような教育実践に再考を促すことを目的とする。

### 2. 先行研究

子どもが職業世界をどう見ているかについての研究に心理学の職業認知研究がある。この職業認知研究の目的は、子どもの勤労観、職業観を測定し、その発達を見ることである。たとえば、日本労働研究機構の調査（2001、2003）では、既存の職業名（「ペ

ットショップ店員」「レジ係」「金属プレス工」「インテリアコーディネーター」など）を子どもに提示し「イメージできない」「知りたい」「やってみたい」の3側面について「はい—いいえ」で評定を求める方法をとっている。この方法は小中高校生の職業知識（客観的）と職業認知（主観的）の関係を捉えるためだと説明されている。

しかし、このような方法は、以下のような問題を含んでいる。まず、第1に、子どもの職業についての知識を研究者の定めた職業分類に沿って捉え、子どもの職業的発達と言語的資源の獲得の多寡を過度に同一視していることである。第2に、このような職業選択を個人の選好や発達の差として捉え、社会的要因の影響については考えていないということである。職業選択は、単に職業名や同質的な知識の量的多寡に従ってなされるものではない。知識の内実は質的にも異なり、その相違は社会的要因にも由来するものである。

本研究では、質問紙調査における職業についての自由記述の分析から、子どもが職業をどのようにイメージしているのかを知識社会的に明らかにしていく。

### 3. データ

■「青少年期から成人期への移行についての追跡的研究（Japan Education Longitudinal Study: JELS2003）」（お茶の水女子大学 21 世紀 COE プログラム「誕生から死までの人間発達科学」）

#### ■対象校

- ・関東地方の1市（以下、Aエリア）にある約半数の公立小学校、中学校、高等学校
- ・東北地方の1市（以下、Cエリア）
- ・各地域で小3、小6、中3、高3を対象とした児童・生徒質問紙調査を実施

#### ■回収状況

- ・Aエリア 2003年10月～12月に実施
  - 小3…回収数 1118 (配布数 1161、回収率 96.3%)
  - 小6…回収数 1164 (配布数 1202、回収率 96.8%)

中3…回収数 1057 (配布数 1128、回収率 93.7%)

高3…回収数 1438 (配布数 1969、回収率 73.0%)

・Cエリア 2004年に実施

小3…回収数 921 (配布数 935、回収率 98.5%)

小6…回収数 962 (配布数 974、回収率 98.8%)

中3…回収数 968 (配布数 1022、回収率 94.7%)

高3…回収数 1150 (配布数 1194、回収率 96.3%)

本報告では以上のデータのうち主に高校生のデータを中心に用いる。

#### 4. 若年者の職業イメージと性別

さて、子どもの自由回答を見る前に、キャリア展望の1つとして最終学歴希望を確認しておく。図表に示したように、Aエリア、Cエリアの両地域で最終学歴希望に男女差が見られる。また、地域差も見られる。たとえば、最終学歴希望を大学・大学院と答える者は、男子では地域による違いはさほど見られないが、女子ではCエリアの方が、Aエリアよりも10%以上多い。

図表 最終学歴希望(高3)

	Aエリア(関東)		Cエリア(東北)	
	女子	男子	女子	男子
高校	16.0	16.9	21.6	28.9
専門・各種・短大	41.7	19.3	35.6	18.0
大学・大学院	28.4	48.4	39.5	45.6
その他	5.5	6.0	2.6	3.3
無回答	8.4	9.4	0.7	4.3
	100.0	100.0	100.0	100.0
N	675	604	610	540

(JELS2003)

このように最終学歴希望に性別によるちがいが見られるにもかかわらず、性別役割分業観を肯定するものはAエリア、Cエリアいずれの地域でも女子で15%未満、男子で25%未満となっている。

図表 性別役割分業観「男性は外で働き女性は家庭を守るべき」(高3)

	Aエリア(関東)		Cエリア(東北)	
	女子	男子	女子	男子
そう思う	4.6	6.6	2.8	7.6
少しそう思う	9.9	17.4	9.2	15.2
あまりそう思わない	36.9	35.9	36.6	36.1
そう思わない	41.6	29.0	50.7	37.4
無回答	7.0	11.1	0.8	3.7
	100.0	100.0	100.0	100.0
N	675	604	610	540

(JELS2003)

ここで、性別役割分業観を肯定する者が少ないにもかかわらず、男子にくらべて女子の最終学歴希望が低くなっているのはなぜかという疑問をあらためて考える必要がある。もちろん最終学歴希望は性別役割分業観以外の要因によっても決定されるが、「男性は外で働き女性は家庭を守るべき」という質問の内実を考えていく必要もある。このような一般的な見解を問う知識に対する回答方法もまた1つの知識

であり、回答者の考えそのものではなく、この問いに対する回答者の態度を少なからず反映させてしまう。キャリアを形成するうえで影響を与えるような性別役割分業観は、「男性は外で働き女性は家庭を守るべき」というような一般的な質問項目ではなく、かれらの職業イメージにこそ忠実に表出されているのではないか。逆にいえば、先の質問項目のなかの「外で働き」「家庭を守る」イメージもまた、すでに男女で異なっており、それが回答に影響を与えているかもしれないのである。

そこで、本研究では、子どもの職業イメージを詳細に分析していくことにする。「お母さんはどんな仕事をしていますか」という質問の自由回答を見ると、母のしごとについてのイメージが男女で異なることが分かる。図表は母親の仕事を家事や主婦だと回答した者を、その答え方によってさらに分類したものである。これを見ると、高3の女子で「主婦」と答えた者は71.4%であるが、男子では56.4%にすぎない。これに対し、男子では「家事」または「していない」と回答する者が女子よりも多いのである。

図表 主婦分類(Aエリア)

	女子			男子		
	小6	中3	高3	小6	中3	高3
具体的	1.7	1.0	0.0	0.7	0.0	0.0
家のしごと	6.7	1.0	0.0	6.3	1.0	0.0
家事	10.0	5.0	7.1	18.9	18.8	18.1
主婦	49.2	71.0	71.4	36.4	34.4	56.4
その他	0.8	0.0	1.2	0.0	0.0	0.0
していない	31.7	22.0	20.2	37.8	45.8	25.5
	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
N	120	100	84	143	96	94

(JELS2003)

#### 5. 分析

\*発表は当日レジュメに沿って行います。

#### 参考文献

- Beger, P. L. and Luckmann, T. 1966=2003[1977]『現実の社会的構成——知識社会学論考』新曜社
- 文部科学省 2004『キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書——児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために』
- 日本労働研究機構 2001 資料シリーズ No.112『中学生・高校生の職業認知』
- 日本労働研究機構 2003 資料シリーズ No.138『小学生の職業意識とキャリアガイダンス』
- 寺崎里水・中島ゆり 2005「小・中学生の『やりたいしごと』」『JELS 第4集 細分析論集(1)』お茶大大学院人間文化研究科人間発達科学専攻 COE 事務局、pp. 43-75
- Williams, W. M. 1974=1980『職業選択の理論——社会学的理論をめざして』誠信書房